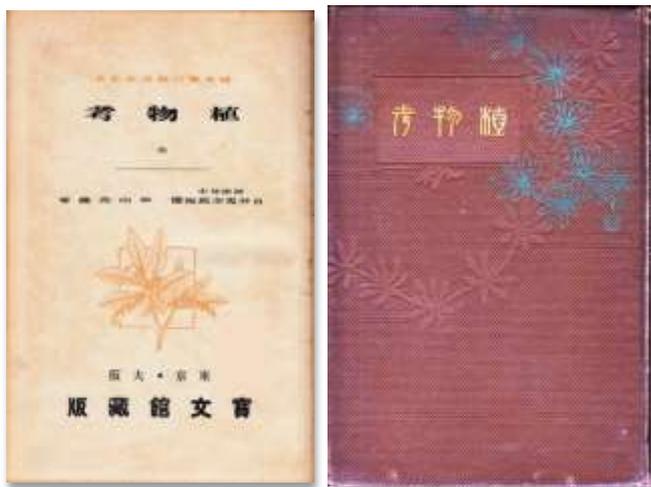


# 鹿沼の自然・栃木の旅

月報第27号

(2014年9月)



『植物考』扉（左）と表紙（右）  
詳しくは4ページをご覧ください

北光クラブ

自然観察クラブ 鹿沼

那須・茶臼岳ハイキング

やがて、道はぐるりと右に廻り左に折れて、賽の河原に出る。ここは石のごろごろせる荒涼とした河原、そのつき当りの垣をめぐらした石が有名な殺生石である。古来、多くの伝説を生み、奥の細道の旅をした芭蕉の立寄ったのもこれだったと思うと、無量の感慨の湧くことを覚える。

殺生石から右の方へ細い道を流れに沿って上る。どこまでもそれに沿って進めば、大道がところどころそれと交叉して走っている。那須岳や朝日岳が前面に近く屹立して、雄大な裾野が扇面のように大きく開く中を、扇の骨のように溪流が深く大地をえぐり流れる。

(中略)

乗越へ来る。ここが荷置場だ。時刻は未だ三時前。ここから見ると、今迄見えなかった那須岳の斜面には硫黄の沸騰しているさまが黄色く、あまりにも黄色く麗わしく、宛ら菜の花のような色をして物凄い煙をあげ、それが西北の風に靡いている。



田部重治著『青葉の旅・落葉の旅』(昭和23年3月20日・東西出版社発行)より

昨年9月にも同じ計画を立て、朝6時に集合して出発しましたが、ロープウェイ山麓駅の駐車場はすでに満車。沼ッ原に目的地を替えて湿原の植物を観察してきました。

今年は集合時間を朝5時にして、再度茶臼岳山頂をめざします。朝日岳や清水平も捨てがたいが次回に譲り、帰路、時間があれば、那須町民俗資料館および旧黒田原駅舎を見学します。

日時：9月21日(日) AM5:00 北小西門集合(解散は PM5:00 頃)(雨天中止)

行程：鹿沼——(東北自動車道)——那須IC——那須岳ロープウェイ山麓駅——(4分)——山頂駅……(40分)……茶臼岳……峰ノ茶屋……

那須岳ロープウェイ 山麓駅——那須IC——(東北自動車道)——鹿沼

服装：長袖シャツ、長ズボン、防寒着(セーター、ジャンパー)、帽子、手袋、  
軽登山靴または運動靴

持ち物：リュックサック、水筒、レジャーシート、雨具（しっかりしたものを）、  
お弁当、おやつ、お手ふき、タオル、ちり紙、筆記用具、レジ袋  
あると便利なもの：双眼鏡、図鑑、ルーペ、カメラ、高度計、ストック、  
1/25,000 地形図は「那須岳」

会 費：おとな 800 円、子ども 400 円（高速道路通行料、ガソリン代含む）  
ロープウェイ片道料金（おとな 670 円、子ども 350 円）は各自で  
お支払ください。

今年度初参加の方は年間保険料 800 円。

問合せ&申込み：9月19日（金）までに、  
チャレンジスクール申込書で北光クラブ、  
または自然観察クラブ・阿部（携帯 090-1884-3774）へ



☞ 本号の内容 ☜

山行案内	那須・茶臼岳ハイキング	2
表紙の本	松山亮蔵『国文学に現れたる植物考』より 「緒言」「あきのななくさ」「むくろじ」	4
	松山亮蔵・その他の著書	8
こんな歌ご存知ですか	「ムクロジの木」（作詞：ダイヤモンド☆ユカイ）	9
Unique な鹿沼の植物	ムクロジ	11
活動報告・1	北光クラブ・サマースクール 2014・水の生き物観察	12
活動報告・2	かめま子どもアーツカレッジ 2014・ 自然観察会・河川の生き物など観察会	12
見てきました	栃木県立博物館・企画展	13
	関本平八ノート	14
こんな虫いました		16
山書談話室		17
愛書家のひとりごと	文庫本蒐集の愉しみ・2	17

松山亮蔵著・白井光太郎校閲『国文学に現れたる植物考』

(明治44年9月25日・宝文館発行)

緒言

上下三千載、我が文学を飾れる和歌・俳句・日記・紀行・物語・随筆等に現われたる植物の種類は、其の数甚だ多し。されど文学に志あるものは、概して科学を疎外視し、科学を修むるものは、比較的文学を顧みざる傾向あるを以て、科学と文学とは、常に其平衡を失し来れり。故に文学を説くもの一たび科学的解義に接すれば、往々にして詩文の韻致を損ずる憾なき能わず。

是れ余が衷心竊に惜しむ所なり。於是諸書に涉りて、此等主要植物を蒐集し、之を古説に考へ、之を現代の学説に釋ねたらんには、當に我が学界を裨益するのみならず、延いては文学と科学との調和を図る階梯にもとの信念は、著者を驅りて自ら揣らず、斯の企を為すに至らしめたり。然りと雖此の事たる、独り植物学的智識を以て善くすべきにあらず、博く各種の文学を涉獵し、更に考証学の一斑を悉して、始めて全きを望むべきものなれば、其の完璧を期するが如きは、著者の譎劣素より膺る所にあらざるなり。唯稿本を空しく筐底に蔵するは、学に忠なる所以にあらざるを思い、且はこれによりて多少国文教授上の欠陥を補い、一般攻学上の切なる要求に応えんものごと、茲に書肆に託して上梓するに至りぬ。此の書によりて、聊かなりとも我が学界の欠漏を裨補し得ば、著者望外の幸なり。希くは、江湖諸賢の是正を仰ぎ、其の足らざるを補い、誤れるを正し、本書をして益完全の域に達せしめんことを切望す。

本書の編述に当り、理学博士白井光太郎<sup>※1</sup>先生には、嚴密周到なる校閲を辱うし、安東伊三次郎氏、宮本慶一郎氏には特に種々有益なる助言を与えられしことは、著者の深く感謝する所なり。

東都礫川街の寓居に於て

著者識

明治四十四年八月一日

(次ページへ続く)



## あきのななくさ

秋の七草を和歌に詠みたるものの最も古きものは、  
蓋し萬葉集八に、山上憶良が

はぎ はなおばなくずばなでしこ はな  
萩が花尾花葛花瞿麦の花  
おみなえしまたふじばかまあさがお はな  
女郎花又藤袴朝貌の花

と詠みしなるべし。これより以後、和歌にも亦文にも詠み且記されて、今の世にまで伝わるに至れり。但此等の草花の中にて、唯一つ朝貌の花につきては、古来古学者の間に彼れ是れの異論を挟むもの多し。蓋しいずれにしても此物の今日いう所の朝顔に中らぬことは、同じく萬葉集十に出でたる。

朝貌は朝露おひてさくといへど

ゆふかげにこそ咲きまさりけり

の吟詠によりて誰人も異議なき所なり。然らば如何なる植物の是に相当せるかにつきては、古来専ら桔梗説

と木槿説とありて、各拠り所あること固よりなれども、木槿は灌木状の栽培植物にして、藩籬などに多く植え、且夏の頃より初秋に亘りて花を開くものなるに反し、桔梗は各地の原野に多く自生して、秋天暫く寒うして開花するものなれば、他の六種の花ともよく釣り合いて、よろしきが如し。千蔭<sup>ちかげ</sup>\*2の詠に、

七草にもれし恨やはれやらぬ霧のまがきのきちかうの花

とあれど、此歌如何のものにや、尚およく考証の条をも合せ見られたし。聞く所によれば、近時藤袴を菊の事なりとなす説あるよし、説の如何に拘わらず、大に傾聴すべきことと思わる。

### 考 証

アサガオとはあしたに咲くかお花をなべていえるにて、ひとつの草の名にはあらず、まず新撰字鏡に桔梗・加良久波・又云・阿佐加保とあるも其証なり、カラクワというが正しきにて、あしたに咲くうつき花なればアサガオともいえるなり、今の人牽牛子のみアサガオとおもえるはたがえり、牽牛子はゆうかげに花咲くことなく、桔梗の花は朝咲き昼にしぼみて、夕かげに又はなやかに咲くものなれば、夕かげにさきまざるようにはい



本書口絵・秋の七草

(上左より)ヲバナ、

フチバカマ、ハギ、ヨミナヘシ、  
クズ、ナデシコ、キキョウ  
と薄紙に示して色刷り図版に  
重ねている丁寧なつくり)

えるなり、今の世に朝顔の野山に自ら生ることなきは、から国より種の渡り来てひろがるにぞあらん、其わたり来りつるは、今の京のはじめのころなるべし。(藤井高尚<sup>※3</sup>)

萬葉の歌に朝貌朝露負云々、此の歌を以て見れば朝貌は即ち槿花なり、牽牛子にあらざること明けし、牽牛子は古今集にケニゴシとよめり、又和名抄には牽牛をアサガオと訓り、然れば木槿花をも牽牛花をもアサガオといえるなるべし、一名にして二物なり、<sup>およそ</sup>凡和漢ともに一名二物多し。(貝原益軒著大和本草)

萬葉に出でたる朝貌は、三首ともに木槿にて、牽牛子をよめるは一つもなきこと篤信(益軒)の説の如し、木槿は今の俗にムクゲといえり、さて木槿は一の漢名<sup>しん</sup>舜というものこれなり、「玉篇にも舜は木槿花なりとあり、又舜花とも舜英ともいいたることもあり、又「和名抄草類に牽牛子は和名阿佐加保」と出し、「本草和名にも牽牛子和名阿佐加保」と見えたるは、既に既に其頃牽牛花盛に世に賞愛されたるに自らけおされて、此の木槿をいう阿佐加保の名はおさおさ人の知らぬ如くなれるに似たり、萬葉の朝貌を桔梗なりとなせる説は、「新撰字鏡に桔梗加良久波又云阿佐加保」と出せるによりてのことにして、秋野七草考などにも其さたせるは、おさおさあたぬことなり、凡草木鳥虫などの名の漢字は、古は人々の心にあてたれば書によりて此と彼かたみに太く異なること多し、さればあながちに泥<sup>なす</sup>むべきにあらず、ことに字鏡て、ふ文は字の上を精しく考え定めたることもなく、当時書なれたる俗字或は大かたの心あてに物したるなども、多き趣きにて、いと、疑わしき事共も数多あれば、更に字をたのおむべきことにあらず、されば桔梗とあれど、阿佐加保というは即ち木槿にて、又加良久波ともあるは、木槿の一名とこそ思われ、さるは木槿は葉の状桑に似たるころあれば唐桑ともいうべく、すべて物の名に唐というは似てあらざるをいうなればなり、又七種の歌にて他の六種皆草なるに、ひとり朝貌を木とせむこと如何と思う人もあるべし、されど、木槿は秋野の草花の中にも交りて咲き、又小木にて草ともいうべきもの多し、さなくとも、草に限りて七種とすべきにもあらず草木とり交えていえりとせむに何の妨げかはあるべき、特に草と木と、きわやかに類を分たざりしは古人のならわしにて、紫陽花をも此の集には木とせる例もあるを思うべし。(鹿持雅澄<sup>※4</sup>著萬葉集品物解)

和歌に木槿をアサガオとよみしは、和漢朗詠集に槿花一日自為榮といい、又去而不返槿籬といえる句に、古今六帖にのせし家持卿の歌に、「秋霧の絶間にみゆるあさかほの花」、又「あさがほを何はかなしと思ひけむ」、の二種を取り合せしをはじめ

とす、秋霧の歌によれば、萬葉にアサガオといひは、必ず此の槿花なるべしと皆人  
思ふべけれども、其歌のさま、更に萬葉の比の句調にあらざれば、所謂家持卿の歌  
にはあらず、新勅撰和歌集に読人不知としるせるに従うべし、且萬葉集に槿花・槿  
籬などの字ありて其槿をアサガオと詠みしこと絶えてなきにても古にアサガオといひ  
は槿花にあらざることあきらけし。(屋代弘賢<sup>※5</sup>著古今要覧稿抄)

- ※1 白井光太郎(しらい みつたろう・1863-1932年) …日本の最初期の植物病理学者、本草  
学者、菌類学者。東京帝国大学理科大学(現・東京大学理学部)植物学科卒業。同大学に世界  
初の植物病理学講座を新設して教授に。日本植物病理学会を設立。
- ※2 千蔭(加藤千蔭・かとうちかげ・1735-1808) …江戸中・後期の歌人、国学者、書家。
- ※3 藤井高尚(ふじいたかなお・1764~1840) …江戸後期の国学者・歌人。備中の人。吉備  
津(きびつ)神社の宮司。本居宣長に師事。
- ※4 鹿持雅澄(かもちまさずみ・1791~1858) …江戸後期の国学者・歌人。土佐の人。藩校  
に勤めながら、ほぼ独学で万葉集の研究に生涯を費やし、『万葉集古義』152巻、『万葉集品物  
解』5巻等の著あり。
- ※5 屋代弘賢(やしひろかた・1758-1841) …江戸中・後期の国学者。江戸の人。

むくろじ 無患樹 又もくれんじ 木練子・木槿樹・木槿子(無患子科)

*Sapindus Mukurosi, Gaertn.*

無患樹は各地に生ずる喬木にして、高さ数丈に達す。葉は羽状複葉にして、小葉  
の数は通常6-7対許あり。革質にして全縁、披針状長楕円形なり。5-6月頃梢  
先端に円錐花叢をなして、5個の花弁よりなれる小花をつく。所謂「むくろじ」なる乾果  
を被包せる外皮は、多量の石鹼質を含有するを以て、洗濯用として効あり。種子は  
質極めて堅く、外面平滑にして黒色を呈す。古来穿孔して念珠を造るに用う。

これも今は昔、中納言師時という人おはしけり、その御許に、珠の外に色黒き黒染  
の衣の短きに、不動袈裟というけさかけて、木練子の念珠の大なる、くりさげたる聖  
法師入り来て立てり。

宇治拾遺物語

又天神は、一切衆生現当二世の爲め、五部の大乘経を書き供養して埋まされ  
り、其軸より木槿樹の木生い出でたり、其木の實を取り数珠とし、念仏百萬遍申さ

(次ページへ続く)

ば、往生疑いあるまじきと承って夢覚めぬ、なんぼう有り難き御夢相候うぞ。

謡曲・道明寺

### 考 証

欒漢語抄云木欒子、無久禮邇之乃木。(和名抄)

欒華和名牟久禮之。(本草和名)

ムクロジの外モクゲンジ即ち欒樹と称する植物あり、其種子の形前者より少しく小なれども、無患子科の植物にして全形よくムクロジに類似せり。但種子は大き2-3分許にして自然に孔あり、無患子と共に念珠を用いられしかど、その種類極めて少なし。

### 松山亮蔵・その他の著書

『生物界之智囊・植物篇』中興館書店 1914 (大正 3)

『生物界之智囊・動物篇』中興館書店 1916 (大正 5)

『動物界之智囊：附・文検<sup>\*</sup>動物科受験指針』(畠山久重・増訂) 中興館書店  
1925 (大正 14)

※文検…文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験、1884 (明治 17) 年より 1948 (昭和 23) 年まで行われていた中等教員免許の検定試験

『植物界之智囊』(畠山久重・校閲) 中興館書店 1926 (大正 15)

和名：ムクロジノキ(ムクロジ科ムクロジ属) 学名：Sapindus mukurossi

無患子・無患樹・木患子、子が患うことの無い樹の意味。

山地に生え、15m～20m になる落葉高木。偶数羽状複葉の葉は長く 5～15cm で互生。4～8 対ある小葉には鋸歯はない。雌雄同株。6月に黄緑色の小花が円錐形に集まって枝先に咲く。秋の黄葉が美しい。果実は直径 2cm の黒い球状で、厚い外皮が秋には半透明の黄褐色になり晩秋の落果時に中でコロコロと音を立て、数珠や羽根つきの玉に使われる。

ムクロジ科の学名 Sapindus は「インドの石鹼」の意味で、ムクロジの果皮に約 10%の化学物質サポニンが含まれ水に溶けると泡立ちがよい。平安の昔、灯明の煤も汚れもよく洗い落とすところから、石鹼として洗濯や洗髪に用いられ、平安時代の公家屋敷には多く植えられていたようである。

(京都・白峰神宮の HP より「霊木」としてのムクロジの説明から)

♪ こんな歌ご存じですか？ ♪

ムクロジの木（作詞：ダイヤモンド☆ユカイ）

Hello,How are you 初めまして

新しい 君の

人生か実りある

ものでありますように

このムクロジの木の下で

君を抱きしめたぬくもり

いつまでも 忘れない

My dear

おばあちゃんか言っていた

幸せの シンボル

雨の日も風の日も

暑い日も寒い日も

このムクロジの木はいつも

僕らを見守り続ける

I'm fine thank you よろしく

My dear

覚えてるかい

初めて見た赤トンボ

一緒に迫りかけた夕焼け

お花畑で寝ころんで

Hello,How are you 君もいつか

知るだろうかこんな

何気ないひと時が

ここにしみてゆく

このムクロジの木の下で

目を閉じると幾つもの

思い出がよみがえる

My dear

覚えてるかい

ケンカして家 飛び出した

冷たい雨が降ったあの日

ムクロジの木も泣いていた

Hello,How are you 時は流れ

パパになった君に

子供たち 笑い声

幸せのシンボル

ムクロジの木は歌い続ける

これからもずっと一緒だね

Hello,How are you よろしく

My dear

I'm fine thank you ありがとう

So long



(NHK みんなのうた 2014年6・7月)

(背景はムクロジの葉の1枚、偶数羽状複葉がよくわかる)

## 未来へ生きる子どもたちへ（ダイヤモンド☆ユカイ）

子どもの頃、父の口ずさむ「赤とんぼ」の歌が好きだった。今でも忘れる事のない大切な記憶の歌。俺が父親になり、いつまでも心の中に生き続けるそんな歌をオリジナルで作り、歌いたいと思った。

その時、頭の中に浮かんできたのは、子どもの無病息災を願う気持ちが詰まったムクロジの木だった。漢字で“無患子”と書く。ムクロジは遠い昔から子どもたちを見守って来た。「ムクロジの木」は、親と未来を生きる子どもたちへのラブソングだ。

## NHK みんなのうた・「ムクロジの木」の解説から

ムクロジ（無患子）の木は昔から家の近くに植えられていた木で、その実は羽根つきの玉にも使われており、現在でも神社の境内や公園で多く見かけられます。作詞をしたダイヤモンド☆ユカイは小さいとき（東京都出身）からこの木を見て育ち、現在はこの木がある公園で子育てをしています（今は栃木県在住）。ダイヤモンド☆ユカイは語ります。「このムクロジに見守られ続けて育ち、この木の下で親子の絆が深められている」と。映像は、2008年8～9月「手紙～拝啓十五の君へ～」(アンジェラ・アキ)を担当した白組。春夏秋冬、ムクロジの木の四季の変化とともに描かれる何気ない家族の日常を通して、親子の愛が育まれていく様子を描きます。

## スポーツ報知（8/25）より

ロック歌手のダイヤモンド☆ユカイ（52）の新曲「ムクロジの木」（発売中）が「泣ける」と評判だ。NHK「みんなのうた」で6、7月に流れ、9月までの再放送が決定している。／ムクロジは無患子と書き、子どもが患わないようにという意味の「幸せのシンボル」。無精子症で不妊治療を受けてもうけた5歳の長女と2歳の双子の男児への愛情を大きな木と重ね、作詞したラブバラードだ。「Hello, How are you 初めまして」と我が子に語りかける始まりから、その子が親になる時の流れを優しいメロディーに乗せ、柔らかに歌う。／「子どもを授かって思った気持ちを歌いたくなかった。親になって子どもの未来を考えるようになり、親のことも理解できるようになった。子どもたちにもいつかそういう時が来るんだなあ」と。子どもたちに初披露した時は自分が涙したという。／最近では70代女性から小さな子どもまでファン層は広い。ブログには「息子の成長を勝手に重ね合わせ涙しちゃいました」「涙が出ました」などと感動コメントが寄せられる。ユカイは「心を込めて作った。自分の人生において意味のある作品。長く歌い続けていきたい」と大切に歌い育てるつもりだ。（後略）（角田 史生）

## Unique な鹿沼の植物

### ムクロジ

ムクロジは鹿沼ではまれに生える植物である。一昨年の春、鹿沼学舎の皆さんと一緒に見笹霊園から黒川に沿ってハイキングをした時、田んぼが終わって、山地帯に入りかけた人家沿いで、参加者の一人、櫻井節子さんが木の実を拾われた。山口龍治さんがその実を見てすぐに、その落とし主、ムクロジの大木が道路と人家の境に立っているのを確認された。僕の知るところ、このムクロジが、鹿沼で最も大きなものである。

他では千手山の山頂から坂田山との境の小さな人の造ったと思われる小さな谷を南に下って3本の大きなモミの木を過ぎた所にある人家の山手に、かつては3本ほどあったムクロジの幼樹が、今では1本になってしまったけれど、すでに5m以上に成長して立っている。また旭ヶ丘から栗野に行く道が南摩川を渡る栗沢橋のたもとにも2~3本ある。



図鑑等の説明ではムクロジの葉は偶数羽状複葉と書いてあるが（9ページ背景参照）、実際にはそれだけでなく、葉軸に左右対になって付いているはずの小葉がずれて、互生になっている偶数羽状複葉もあれば、互生になってしまったがゆえに左右の小葉の数が合わなくなり、先端に1枚飛び出して奇数羽状複葉になっている葉も多い（左図参照）。

羽状複葉といえば普通、小葉が葉軸に対になって付くものであり、さらに先端に1枚付くか付かないかによって、奇数か偶数かは決まっているものである。小葉の付き方が対生になったり互生になったり、小葉の数が偶数であったり奇数であったりする樹木はめずらしい。（阿部良司）



「牧野日本植物図鑑」（北隆館）



## 活動報告・1

北光クラブ・サマースクール2014  
水の生き物観察  
8月10日(日) 天気・雨のち止む

中止に  
なりました

夏休み恒例の人気企画で、大勢の参加申し込みをいただいていたのですが、前夜の雨で黒川ははじめ各所での増水が予想され、お楽しみの「川に入って魚とり」に安全上の懸念があったため、今年は残念ながら中止となりました。

何しろ雨の多い夏で、各地で記録的雨量とそれに伴う土砂災害が頻発しています。被災された方々にお見舞い申し上げます。

## 活動報告・2

かぬま子どもアーツカレッジ2014  
自然観察会・河川の生き物など屋外観察会  
8月8日(金) 天気・くもり

鹿沼市の助成により「放課後子ども教室」を毎週火・金曜日に文化活動交流館で展開しているNPOから依頼されて、昨年に続き、交流館前の黒川河原で水生生物の観察会を開きました。午前からの小雨が案じられましたが、幸いに止んで来て、集まった幼児から小学校低学年の子どもたちとその保護者20名ほどの皆さんと一緒に、黒川から上がった魚やいろいろな水生昆虫を楽しく観察しました。

今夏すでに何回か黒川の生物採集をしてきましたが、今回初めて、アカザやサワガニが捕れました。

### 自然観察クラブ 会費納入のお願い

- |                        |        |
|------------------------|--------|
| ☆ 年会費(個人または家族)         | 1,800円 |
| // (会報不要または直接取りに来られる方) | 600円   |

※ 会報はインターネットでご覧になれます。

#### ☆ 会費の主な用途

会報発行・発送用諸経費(郵送料、封筒・印刷用紙、  
インク代等)、プリンター保守費用、臨時催事の通信、その他

『郷土の植物研究家 関本平八』展  
会期：2014年3月21日（金）～6月15日（日）  
会場：栃木県立博物館・自然系テーマ展示室

栃木県立博物館にて自然系テーマ展として上記企画展が開催されました。

関本平八は、栃木県の植物研究に於いて、「栃木県の牧野富太郎」とも言うべき業績を残した人です。

訪問した6月8日（日）は終日激しい雨の日で、緑濃い県立博物館の前庭には、ヤマボウシの白い花が枝先にぎっしりと咲き揃い、ただでさえ重そうな枝を雨に打たれて耐えているように見えました。守衛さんに訊くと（彼は花の名を知らなかった）、こんなに見事に咲いたのを見るのは初めてとのこと。



「関本平八展」は、広い博物館の中の、意外にもただ1室だけでの展示ながら、1人の植物コレクターが生涯をかけて集め、記録し、研究した足跡がぎっしり詰まっています。丹念に見て行けばいくら時間があっても足りないくらい濃密なものでした（これはほんの一部と）。例えば牧野富太郎と交わされた書簡などには、植物同定をめぐる情報交換の様子に、彼らの生の息遣いを感じるようです。牧野先生が日本各地で集めてきた植物と夜な夜な格闘している時、栃木県では関本先生が同じことを県内の植物で展開していたのだろうか。全国の植物学者が昔も今もそうしているのか（…地味な世界だなあ）。

この1部屋で、素人としてはたぶん充分な時間を過ごした後、館内の他の展示も、限なくというほどではありませんがなかなか楽しんで、初めての博物館訪問に満足して帰宅の途に就いたのでした。

…関本平八が収集した自然史に関する資料は、植物標本コレクション、日記や文献、そのほかメモなどを中心に数多く残され、娘夫妻によって保存されてきた。中でも野外で採集された多数の標本データとこれに基づいたリストは、現在の栃木県に生育するあらゆる植物（フロラ）の変遷を知る上で欠かせない、重要かつ貴重な資料となっており、現在の植物研究の基礎となっている。県立博物館では、残されたこれらの記録を後世に伝えるべく整理・保存に努めている。（博物館の解説より）

## 関本平八（せきもとへいはち）ノート

1889～1969（明治 22～昭和 44）年、大正～昭和時代の植物学者。

栃木県芳賀生まれ。幼少時より好奇心強く、中学校への通学（もちろん徒歩）の途上、道端や田んぼの畦に育つ植物（草）に興味を持ったという。

中学卒業後の尋常小学校代用教員に始まり、師範学校（第二部）卒業後は訓導（教諭）、県立高女・中学校・師範学校教諭を歴任、退職後も私立下野中学校（のち作新学院）と 40 年の長きにわたり教員生活を送る。この初期に 6 年かけて、ほぼ独学で文部省中等教員試験検定（文検、8 ページ参照）の理科・植物科・動物科・生理衛生科・鉱物科に合格している。

教職の傍ら、県内各地に植物採集に出掛け（30 年間に 2000 回以上という！）、多数の押し葉標本を作製（関本コレクション）、クリヤマハハコ、ヒメザゼンソウ、その他多数の特産種および県内初発見の植物を記録する。また当代一流の植物学者たちと積極的に交流し、牧野富太郎や本田正次を講師に招くなど野外講習採集会、観察会を多数実施、また自身も様々な校種の教壇で、自然から学ぶことの大切さを伝えた。その関心は植物にとどまらず、鳥、昆虫、岩石にも及ぶ。

1930（昭和 5）年、「下野植物同好会」（現在の栃木県植物同好会の前身）を創立、初代会長に就任。この発会式後の「古賀志山採集会」に同会顧問として招くなど、牧野富太郎と県内の採集会などで度々行動を共にしたことが、『牧野富太郎植物採集行動録（明治・大正篇、昭和篇）』と関本日記および後述『植物総覧』などの記録から読み取れる。

1941（昭和 16）年 52 歳の時に、当時の文部省から研究活動費用の支援を受け、それまでの研究成果をまとめて、栃木県では初めての本格的な維管束植物リストである『栃木県植物総覧』を発刊、1951（昭和 26）年 62 歳の時には『続・栃木県植物総覧』。正続合わせて 3,380 種（栽培種 542 種を含む）を網羅する。

県下の植物研究に尽くした功績で、1949（昭和 24）年教育委員会から初めての県文化功労賞を、陶芸家で人間国宝の濱田庄司や版画家の川上澄生と共に受賞。

1969（昭和 44）年 1 月 18 日死去（牧野富太郎とたまたま同じ命日）、79 歳。

昨年の牧野富太郎生誕 150 年記念事業に資料が提供され、今年に関本没後 45 年として、改めてその業績が掘り起こされている。

関本平八著『栃木県植物総覧』（昭和 16 年 3 月 13 日発行）



**謹みて此書を亡き父母の霊前に提ぐ**

母が春早き四月、塩原温泉よりの帰途、黄色なキブシの花の一枝、折り来り下されし。又或時は天南星の雌株に見事に美しく熟せし実を（宛然彼の餅菓子鹿の子の如き）初めて見たりとて拾い来りて置かれし。

父が野仕事の際、陸稲に寄生のナンバンギセルの姿、奇なり珍しとて採り来りて置かれし。

日曜日など帰宅して何時も標本を一杯に見散らしたる後を叮嚀に始末して下されし事共、父母ありし頃を懐かしく偲びつつ。

（同書に付された前書）



「皇紀 2600 年記念」とはあるが、むしろ下野植物同好会創立 10 年の記念出版の観あり、10 年間の活動記録が写真入りで付され、「牧野博士を招聘」の記載も度々みられる。

左はその写真の 1 枚。中央に著者、その左隣に「牧野博士」（昭和 7 年、塩原八幡神社前にて）。

左下『続』の方は扉に「還暦記念」と冠されている。

『続・栃木県植物総覧』（昭和 26 年 3 月 15 日発行）



栃木県植物同好会会報「とちのき」  
バックナンバーより



16 号  
（昭和 28 年 1 月）  
（宇都宮植物同好会当時）



108 号  
（平成 26 年 3 月）  
（最新号）

## ☺ こんな虫いました ☺

夏は昆虫の季節。昆虫採集に出かけなくても、虫の方からやって来ます。マイナーな者たちではありますが、身の回りで見つけた虫のあれこれ写真集！



アリグモ  
(6月30日、戸張町・店頭)  
毎年この時期アリのふりして  
店にやって来る



カタジロゴマフカミキリ  
(6月30日、店頭)



アオオビハエトリ (グモ)  
(7月2日、店頭)  
腹のくっきりした縞が印象的



オオトモエ  
(8月15日、上田町・住宅)



シロヒトリ  
(8月22日、戸張町・住宅)  
毎晩同じ網戸に止まっていた  
前脚のあたりが赤い



オオウンモンクチバ  
(8月27日、店頭)



ツマキヘリカメムシ  
(8月30日、店頭)



??ガ  
(8月31日、店頭)



ホシヒメホウジャク  
(9月3日、店頭)



??ガ  
(9月7日、店頭)



マエアカスカシノメイガ  
(9月13日、店の外壁)



ベニシジミ  
(9月14日、戸張町・空地)

## 山書談話室

恒例、田部重治研究会・白坂正治氏からのおたよりです。

前略

過日の台風で鹿沼市の被害が伝えられてましたが、町名は違っていたとはいえ、同じ市内、気にかかっておりました。

『月報第26号』“内容”を拝見し、“山書談話室”とは“愛書家のひとりごと”の新バージョンかとページを繰りましたら、何と阿部様と愚生との誌上対話コーナーとの由。恐れ入りましたが、光栄なことと存じ、阿部様が絶句なされることのないよう、ふやけた頭を、田部文学の行間から湧き出づる清水にひたさねばと思っております。改めましてどうぞよろしく御願い申し上げます。今号の書影「旅への憧れ」も、その象徴的例といえましょうが、田部重治の著作は、表紙と本文がよくマッチしているように感じます。それは「日本アルプスと秩父巡礼」の現代では再現不可能な装幀の紡ぎにも巡礼びと、求道者たる魂が宿っているように。 草々



14年8月16日

## 愛書家のひとりごと

### 文庫本蒐集の愉しみ・2

かつて山岳書の文庫書というと、まず思い浮かぶのは中公文庫であった。昭和50年に岡田喜秋の『思索の旅路』が出たが、山岳書の筆頭は昭和52年の板倉勝宣著『山と雪の日記』であった。さらに大島亮吉の『山——随想』、上田哲農の『日翳の山ひなたの山』、冠松次郎の『溪』、藤木九三の『雪・岩・アルプス』、岡田喜秋の『旅に出る日』、西岡一雄の『泉を聴く』、伊藤秀五郎の『北の山』、石岡繁雄の『屏風岩登攀記』、深田久弥の『わが山山』、芳野満彦の『新編山靴の音』が出たのが昭和56年で、以後は現代の山岳書を中心に文庫化されて行った。戦前戦後の名著はまだまだあるのにどうして文庫化されないのか、と不思議に思った。

平凡社ライブラリーの存在に気が付いたのはいつであったろうか。宇都宮の紀伊國

(次ページへ続く)



屋書店に平凡社ライブラリーのコーナーを見つけた。従来の文庫本よりずっと大きく、字も大きい。従来の文庫本は老眼鏡をしていても、一応虫眼鏡を用意しないと、読み始める気持ちにならないが、これならすぐに読める。最初買った山の本が何であったか忘れたが、ウェストン著、岡村精一訳の『日本アルプス』はすでに再版となっていた。この本が山岳書第一号であるが、発行日は1995年4月15日。次に出たのが田部重治の『わが山旅五十年』で、この本にだけ「創刊5周年」と書かれた真赤な帯が付いている。ただし、残念ながら、この本の内容に関する記載は全くない。発行日は1996年2月15日。さらにこの年、3月15日に武田久吉の『尾瀬と鬼怒沼』、5月15日に冠松次郎の『黒部溪谷』、6月15日に辻まことの『山からの言葉』、9月11日にウェストン(水野勉訳)の『日本アルプス再訪』、12月15日に小島鳥水『アルピニストの手記』と続々と山岳書の名著がお色直しされて発行されていった。しかしまだまだ続く。

1997年は6月15日に松方三郎の『アルプス記』、11月15日に桑原武夫の『登山の文化史』、と低調であったが、1998年には2月15日に辻村伊助の『スイス日記』、3月15日に浦松佐美太郎の『たった一人の山』、8月15日に加藤泰三の『霧の山稜』、9月15日に辻村伊助の『ハイランド』と再び活況を取り戻す。さらに1999年には2月15日に武田久吉の『明治の山旅』が発行され、ついには小暮理太郎のあの分厚い2冊、『山の憶い出』(上)が6月15日、(下)が7月15日に発行されるに至った。さらに12月15日には畦地梅太郎の『山の眼玉』も発行されている。

2000年には上田哲農の『日翳の山ひなたの山』が9月8日に発行されただけで、いよいよ出尽くしたか、と思わせたが、細々と続き、2005年7月11日に大島亮吉の新編『山一紀行と随想』、2006年1月11日に野中至・野中千代子の『富士案内・芙蓉日記』、2008年3月10日に山口耀久の『北ハツ彷徨』と発行されていった。

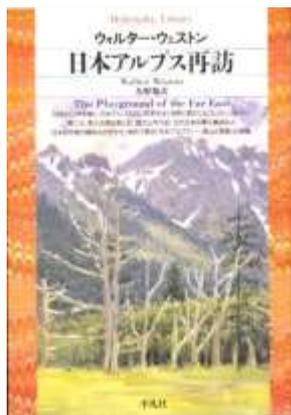
山岳書以外でも興味をそそる本が多い。1993年11月15日には中西悟堂の『愛鳥自伝(上下)』、1996年には瓜生卓造の『桧原村紀聞』、1997年5月15日には串田孫一の『北海道の旅』、1998年1月15日には岡茂雄(岡書院→梓書房)の『炉辺山話』、11月15日には岡田喜秋の『秘話ある山河』、2001年2月7日には熊谷樞(熊谷守一の子)の『晴れのち曇り・曇りのち晴れ』、3月10日には洪谷章の

『牧野富太郎』、7月10日、8月10日に串田孫一の『博物誌』(上下)、2003年8月10日に谷有二の『山名の不思議』が発行されている。

1995年4月15日、ウェストンの『日本アルプス』を筆頭に、数々の山岳書が「平凡社ライブラリー」に収められていくが、それに先立って、1993年11月15日、中西悟堂の『愛鳥自伝』(上下)が発行されていた。中西悟堂の自叙伝としてはわが家の書架にはすでに『野鳥と生きて』(昭和31年12月10日、ダヴィッド社)、『かみなりさま』(昭和55年12月8日、永田書房)、『野鳥開眼－真実の鞭』(平成5年12月11日、永田書房)があったが、文庫の目的を、すでに単行本として発行されていた著作物を、安い価格で読者に提供する、と認識していた僕は、この『愛鳥自伝』(上下)の単行本を脳内探求書目録に入れておいた。そしてある時、『愛鳥自伝』なる本は見たことも聞いたこともないと気が付いて、やっとこの平凡社ライブラリーの扉を開けた。そこには「本書は平凡社ライブラリー・オリジナル版で、月刊誌『アニマ』(平凡社)1973年5月号～1977年9月号に44回にわたって連載された『愛鳥自伝』を編集したものです。」とあった。この著作はいわば文庫で初めて本になった著作なのである。

また1996年9月11日に発行されたウェストン著『日本アルプス再訪』もまた平凡社ライブラリー・オリジナル版である。この本の日本語訳は1970年に岡村精一訳『極東の遊歩場』として山と溪谷社より発行されている。『日本アルプス再訪』は、平凡社ライブラリーのために提供された訳書である。

文庫本にはこのように、かつて単行本として発行されたこ



(次ページへ続く)

とのない著書や訳書が登場することがある。これは文庫本蒐集の大きな拾いものと言えるだろうか。

昭和11年5月10日、9月30日に発行されたウインパー著、浦松佐美太郎訳『アルプス登攀記』(上下)(岩波書店)も文庫本として初登場した本であるし、戦前戦後にかけて、山田吉彦と林達夫によって訳されたファーブル『昆虫記』(岩波書店)も20分冊の岩波文庫としてデビューしている。

ところで、買った時すでに再版となっていた平凡社ライブラリー、ウェストン著・岡村精一訳『日本アルプス』。後に僕は阿佐ヶ谷の穂高書房で初版本を手に入れた。表紙をめくと扉には水野勉さんの署名が書かれていた…。

今月9月18日、新潮文庫は創刊100年を迎えた。(たぶんつづく)

(阿部良司)



鹿沼の自然・栃木の旅 月報第27号

2014年9月発行

北光・自然観察クラブ 鹿沼

鹿沼市戸張町1818

(クリーニングハウスあべ内)

発行人 阿部 良司

携帯 090-1884-3774

FAX 0289-62-3774

携帯 ☎ shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail a2b5r7j7@one.bc9.jp

ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

